



将棋棋士を描いた小説から

校長 三村 孝志

今、話題の中学生と言えば、卓球の張本智和選手と将棋の藤井聡太四段ということになるでしょう。藤井四段が29連勝を達成したとき、速報のテロップが流れ、ニュース報道によると、新聞の号外が出ました。大変な偉業なのだろうと門外漢の私も思っています。スポーツや芸術などの領域で、中学生がすばらしい活躍をすることがあります。安易に「天才」という言葉を使うことは避けたいと思いますが、世の中にそう呼ぶ以外にない人が存在することも事実です。ただし、知識が豊かで、テレビのクイズで正解を答えている芸人さんや大学生は天才ではありません。

将棋で、私が思い出すのは、織田作之助の「聴雨」という作品です。大阪が生んだ、個性的な棋士坂田三吉（阪田と表記する場合もあるようです。ここでは作品中の表記を用います。）が、昭和12年の、木村義雄八段、花田長太郎八段との対局を題材とした短編小説です。坂田は、木村との対局において、後手の第一手で九四歩という定石を破った手を指します。結果は坂田の完敗でした。小説では「攻撃の速度を重要視している近代将棋に、二手損をもって向かったのは、さすがに無暴（小説の表記のままです。）」と書いています。しかし、一方で「六十八歳の老齢で、九四歩などという天馬の如き潑刺とした若々しい奇手を生み出す坂田の青春」とも表現しており、批判をしているわけではありません。織田作之助は、「坂田の定石への挑戦」に共感しているのです。いい小説です。将棋の定石と常識を同じに扱うことはできませんが、常識と思われることに挑戦していくことが、新しいものを生み出してきたとも言えるように思います。

さて、坂田三吉の弟子に藤内金吾八段がいます。藤内八段が登場する小説に藤沢桓夫「小説・内藤国雄」があります。藤内八段は、少年だった内藤國雄（小説では国と書いていますが、國が正しいようです。）九段にこう言います。

「な、内藤。良い将棋を指すためには、虚心坦懐に落着いて、決して慌てずに、読みに読んで、読み切った上で、自分が一番正しいと思う手筋を指さんといかん。考えを中途半端で読み切ってはいかんのや。何んぼ時間を食うても構めへん。そんなこと気にせずに、考え抜いた将棋を指す。その習慣を身につけることが大切なんや。わかったな。」

いい言葉ですね。これは小説ですから、藤内八段が実際こう言ったかどうかはわかりません。「考える」ではなく「考え抜く」、「中途半端で読み切ってはいかん」など、これらの言葉は、陳腐な言い方になりますが、やはり人生を創ることにつながるように思われます。生徒のみなさんにつけてほしいのは、単なる考える力でないと思っています。「考え抜く」力なのです。人生は、選択の連続です。その選択で、今日はカレーにするか、トンカツにするかという選択は、「中途半端に読み切ってはいかん」ということはありませんが、人生上の大問題では、あるいは自分の将来に関わる問題では、「考え抜く」ことが求められるでしょう。「本当にこれでいいのか」「他に手はないのか」、考えに考えて、「これしかない」という手を指す（選択をする）ことです。必ず結果は出ます。失敗することもあるでしょう。でも「あのとき、もう少し考えていれば」と後悔するのではなく、あのとき自分は「考え抜いて」、自分の道を選んだのだと思えたらすばらしいことです。

藤井四段は加藤一二三九段の引退に際し、『讀賣新聞』（平成29年6月21日）でこう述べています。

どうかお体を大切にしてください。先生が見せて下さった「最善の一手を追求する」姿勢を私も貫いて、一步一步、実力をつけていきたい、と思っています。

「神武以来の天才」と呼ばれた加藤九段に対して敬意を表し、自分の決意を述べた、とてもいい言葉です。

「最善の一手を追求する」という言葉を、私も大切にしたいと思っています。

